

# 名詞化辞「の」の生起が随意的な統語環境におけるその解釈原理

堀江 薫

東北大学大学院国際文化研究科

980-77 仙台市青葉区川内 (khorie@intcul.tohoku.ac.jp)

## 0. はじめに

日本語の名詞化辞「の」は、「こと」・「もの」・「ところ」等の非常に一般的な語彙的意味を有する名詞とともに「形式名詞」という文法カテゴリーに分類されることがある (cf. 非手1967) が、「こと」・「もの」・「ところ」等の名詞とは異なって、それ自体では明確な語彙的意味を持たない。

然し「の」は、生起する統語環境によって、他の文法形式素とある種の意味的対立をなすことができ、そのような環境では「の」に何らかの意味・機能を認めることができる。その代表的な環境が、「見る」・「知る」等の補文を取る知覚・認識述語の内項の位置であり、この環境では「の」は、もう一つの名詞化辞「こと」との間に「具体的」対「抽象的」といった意味的対立を示すことが知られている (cf. 久野1973)。

- (1) [列車が脱線する] の/\*こと を見たという  
通報があった。(「具体的」事象のため「の」のみ可)

このような対立とは別に、「の」の生起が随意的であるように見える以下のような統語環境がある。

- (2) 伝統工芸の現状をとらえ、現代生活での意味  
を考える の/0 にふさわしい内容だ。(「朝  
日新聞」宮城版、97.2.22; 原文は「の」が生起)  
(3) [どうしても来たくない] の/0 なら 来な  
くてもいいですよ。

このような環境では、「の」はいわば無形(ゼロ)の名詞化辞(以下「ゼロ」と称す)と自由変異の関係にあるように見える。

名詞化辞「の」の意味的機能に関する先行研究では、「の」と、「こと」など他の有形の文法形式素との対立・交替現象の本質を考究した研究や(例えば久野1973)、「の」の機能を単一の意義素に還元しようとした研究(例えば 渋谷1996)はあったが、(2)・(3)に示されたような「の」と「ゼロ」

との交替現象の本質の解明をめざした研究はあまり多くなかった(後述の田野村1990を除く)。

本研究は、(2)・(3)のような統語環境における「の」と「ゼロ」の交替現象の本質は何か、その背後にはどのような解釈原理が働いているか、ということを明らかにすることを目標とする。

## 1. 名詞化辞「の」・「ゼロ」の交替現象とは何か

名詞化辞「ゼロ」は古典日本語において行われていた名詞化の手段であるが、近年に至るまで公文書等における書き言葉・慣用語を中心に用いられてきた。以下はその例である。

- (4) 土佐の高知のはりまやばしで[坊さんかんざし  
買う] (0) を見た。(「ヨサコイ節」19世紀  
の俗謡)  
(5) しかしてバルカン戦以上に[悲観すべき] (0)  
は来るリビア戦線におけるドイツ軍の文字通り  
電光的なる大進撃であって... (「朝日新聞」  
昭和16年4月13日夕刊、林1977, p.352)

現代語においては一般に「ゼロ」は名詞化の手段としては用いられなくなってきており、「の」に代表される、有形の名詞化辞を用いた名詞化が一般的である。然しながら現代語においても例文(2)・(3)で示したように、「ゼロ」が依然として残存している統語環境がある。そのような統語環境において、「ゼロ」は有形の名詞化辞「の」と交替する(ただし「ゼロ」の使用が固定している一部の慣用語では「の」は用いられない; 例. 兄のそのひとこととで黙らざる 0/\*の を得なかった)。

「ゼロ」が残存している統語環境は以下の2つに大別できる。

- (A) 固定した慣用語的表現における「に」等の格  
助詞の直前の環境 (cf. 例文2)  
(B) 「なら」・「か」・「だろう」・「かもしれ  
ない」等の助詞・助動詞の直前の環境 (cf. 例  
文3)

(A)と(B)は、いずれも「ゼロ」と「の」の交替現象の観察される統語環境であるが、2つの環境の間には「ゼロ」と「の」の意味的相違に関して本質的な差がある。まず環境(A)においては、以下に示すように「ゼロ」と「の」は自由変異の関係にあり、意味的な相違はない(ただし「ゼロ」の使用を「文語的」と感じる話者がいることから文体的な相違はありうる)。

(6) 交通が発達する 0/の につれて 海外へ出かけるひとが多くなった。

(7) 文化勲章を授与される 0/の に ふさわし  
い業績だ。

例文(2)・(6)・(7)のような環境における「の」の機能は、例文(1)における「の」の機能と本質的には同じく、「補文の境界表示」であると考えられる。例文(2)・(6)・(7)と例文(1)の間の差は、補文を内項とする述語が慣用句を構成しているか(例文2・6・7の述語)否か(例文1の述語)という相違である。慣用句を構成する述語の場合は、文法システムの通時的变化(この場合「ゼロ」から「の」への変化)の影響を受けにくいことから「ゼロ」の残存がいまでも許容されるものと考えられる。これに対して例文(1)の「見る」のような通常の述語は、通時的变化の影響が及びやすいため、現代語では例文(4)のような「ゼロ」による名詞化は不可能である(「ゼロ」から「の」への通時的变化に関してはHorie 1993, 1995を参照)。これに対して環境(B)では、文脈によって強弱の差はあるものの、「ゼロ」と「の」の間には何らかの意味的相違が認められることが多い。話者の命題に対する確信の度合いを表す助動詞「だろう」・「かもしれない」の直後に「ゼロ」と「の」が生起する以下の例文(8)～(10)を参照されたい。

(8) 友子と結婚する時、大畑は高正の職業にひっかかったらしい。つまり、高正が食堂の親父であることが気に入らなかったのだろう。(略)  
高正がそのことを聞いたのはずっと後になってからだ。それを知っていたら二人の結婚を厭うのは第一に彼であった(0)だろう。(山上龍彦「つるりとせ」、実業之日本社、1996年、p.77)

(9) 夜の地球を人工衛星から撮った写真を見せてもらって、おどろいた。日本列島がほぼ形どおりに浮かび上がっている。(略)国全体が不夜城のように光っているのは、豊かな消費生活を映しているのかもしれないが、その分、美しい星空が失われているのだ。(「天声人語」89.7.22)

(10) 坂本弁護士も、社会的弱者に深い共感を持ち、訴訟の相談などは、仲間も驚くほど安い料金で応じていたという。その「行動派の熱血漢」(同僚の話)はいま、どこでどうしているのだろうか。「息子から電話がある(0)かもしれない」と、お母さんは... (略)。(「天声人語」89.12.7)

(8)～(10)における「ゼロ」と「の」は互いに入れ替えるのが難しく、何らかの意味的な対立をなしていると考えられる。このような「ゼロ」と「の」の交替現象を示す助動詞としては他に「にちがいない」がある(例。きつともう家を出た 0/の にちがいない)。(8)～(10)のような統語環境における「ゼロ」と「の」の意味的対立は、文脈に依存する度合いが高く容易に捉えがたいが、一般的に言って「の」が生起している場合には、田野村(1990)が「承前性」と呼んでいるところの、先行の言語的文脈・または言語外の状況を受けるという、「のだ」の変異形としての解釈が適用されるケースが圧倒的に多く、この解釈は(8)・(9)に関しても当てはまる(この観察は、小説・新聞などのデータに基づいて「のだ」の変異形の意味解釈の数量的な調査を行った三輪1995に負うところが大きい)。例えば(8)では「の」は「大畑が高正の職業にひっかかった」という先行文脈を受けており、また(9)では「の」は「国全体が不夜城のように光っている」という先行文脈を受けていると考えられる。これに対し(8)と(10)の「ゼロ」はこのような「承前性」を欠いている。

(8)～(10)では「文末」に近い位置で「ゼロ」と「の」の交替が見られたが、以下に示すように「なら」・「か」等の助詞の直前という「文中」の位置でも「ゼロ」と「の」の交替現象は見られる。

(11) ボイジャー2号が最終目標の海王星に最接近するのは8月25日。太陽系の果てを巡るこの惑星にも、土星や天王星のような輪があるのではない(0)かと予想されている。どんな輪や衛星の映像が送られてくるのか楽しみだ。

(「天声人語」89.1.16)

(12) 15歳になった時、親に見せるように、と学校で手紙を渡された。「16歳で運転免許がとれる年齢になります。希望する(0)なら1年間、運転を教えます」という趣旨だ。

(「天声人語」89.7.13)

(13) 作家開高健さんがタンカを切っている。失われていく山や川の惨状を、人間の愚かさに照らして言わないではいられない。もう1つ、近ごろのタンカはこうだ。日本が大国と言いたいのなら、川の1本や2本、手つかずで残さんか。

(「天声人語」89.5.1)

(11)における「ゼロ」を「の」で置き換えるのは難しいが、逆に「の」を「ゼロ」で置き換えるのは可能であるように思われる。また(12)における「ゼロ」を「の」に、また(13)における「の」を「ゼロ」と置き換えるのは可能であるように思われる。ここで重要なことは、(11)・(13)の「の」には、前述の(8)・(9)の「の」ほど明確に「承前性」の意味が認められないということである。むしろ(11)・(13)の「の」にはきわめて一般的な用語ながら「強調」とでも言うべき意味が認められ、そのような意味を欠く「ゼロ」と対立しているとも解釈できる。

このような「の」の解釈の相違は、「の」の生起する位置、及び「の」の直後に生起している文法形式素の機能と密接に関係している。(8)・(9)においては、文末において文の命題内容に対する話者の態度を表示する助動詞の直前という統語環境が、「の」に、文の命題内容に密接に関係する「承前性」という意味を担わせる強い傾向があるのだと考えられる。これに対して(11)・(13)においては、文中という、文の命題内容に関する判断がまだ示されない位置であることと、「か」・「なら」という「非現実」を表す従属節を構成する助詞の直前であることから、文末ほど明確に「承前性」の意味が認められず、むしろ命題内容に直接関係しない「強調」

のような意味がより認められやすくなるものと考えられる。

## 2. 「有形」と「無形」の言語形式が対立する際の解釈原理

「の」と「ゼロ」の間に見られるような「有形」と「無形」の言語形式の交替現象というのは日本語に特有の現象ではない。これに類似した現象としてBolinger (1972, 1977)の指摘した、英語における補文化辞「that」と「ゼロ」の交替現象がある。以下の例文を参照されたい。

(14) The forecast says that/0 it's going to rain. (Bolinger 1977, p.11)

Bolinger(1977)は「言語の自然な条件は一つの形式を一つの意味のために保持し、一つの意味を一つの形式のために保持することである("the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form", Ibid, p.x; 翻訳は堀江)」という仮説を提示し、この観点から「that」と「ゼロ」の交替現象を説明している。(14)に関してBolingerは、部屋に入ってきて何の気なく天候について語る際に「that」を用いるのは奇異な感じがするが、「What's the weather for tomorrow?」というような問いに対する答として「that」を用いるのは自然であるという観察を行い、この補文化辞の「that」は、以前の事柄を指しているという点で、いまだに基本的な直示・前方照応の用法の名残を残しており、「That man insulted me」のような文における指示代名詞「that」の用法と連続していると述べている (Ibid, p.11)。

Bolinger (1972)はまた、これとは性質を異にする「that」と「ゼロ」の交替現象として以下のような最小対における「that」の省略可能性の違いを指摘した。

(15) It's clear (0) he did it.

(16) It's unclear that/\*0 he did it. (Ibid, p.39)

Bolingerは(15)のように主節の述語が肯定であり従属節も肯定の命題を表している場合は、主節と従属節の間に意味上の衝突(conflict)がなく、従って補文化辞「that」が省略可能であるのに対して、(16)のように主節の述語が語彙的な手段で否定されており、主節と肯定的な命題を表す従属節との

間に衝突がある場合には「that」の省略がより困難であるという説明を行っている (Ibid, p.38)。

(14)～(16)で見た「ゼロ」と「that」の意味的対立の例および(8)～(13)で見た「ゼロ」と「の」の意味的対立の例は、ある統語環境で「無形」と「有形」の言語形式の間に何らかの意味的対立が認められるとき、「有形」の形式が持ちうる意味解釈には少なくとも以下の2種類の方向性がありうることを示唆している。

(I) 「有形」の形式が(先行する)言語・非言語  
文脈を指示する

(II) 「有形」の形式が、「有標の」(通常では  
ない)事態を示す

解釈原理(I)は、「の」に関しては例文(8)・(9)のような文末の助動詞の直前の位置でより明瞭に認められ、「that」に関しては例文(14)で例証されたものである。また解釈原理(II)は、「の」に関しては、例文(11)・(13)のように、文中の位置に生じた「の」が(強調のない通常の文と異なって)「強調」といった意味を持っていると解釈される場合に認められ、「that」に関しては(16)のように、従属節の命題内容が語彙的手段で否定されることによって主節と従属節の間に(意味上の衝突のない通常の文と異なって)「意味上の衝突」が生じている場合に認められたものである。

解釈原理(I)は何によって動機づけられているのだろうか。補文化辞の「that」に関しては、Bolingerが提示したように元来の「指示代名詞」の機能が残存していると考えたと自然に説明ができるが、「の」に関しては、現時点では「この・あの・その」、「赤いの」等の「代名詞」用法に関連している可能性を指摘しておくに留めたい。解釈原理

(II)に関しては、「有標の構造は対応する無標の構造と比べてより複雑である(あるいはより大きい)傾向がある("The marked structure tends to be more complex (or larger) than the corresponding unmarked one")」という、Givón(1995, p.28)の主張する有標性の原理が関係しているものと考えられる。

### 3. おわりに

本研究では、日本語の名詞化辞「ゼロ」と「の」が交替する統語環境を考察し、「無形」と「有形」の言語形式が意味的な対立をみせる際の、「有形」の言語形式の意味解釈原理を提唱した。今後はより多くの事例の調査に基づき、本研究で提唱した解釈原理の精緻化を目指したい。

### 引用文献

- Bolinger, Dwight. 1972. That's that. Berlin: Mouton.
- . 1977. Meaning and form. London and New York: Longman.
- Givón, Talmy. 1995. Functionalism and grammar. Amsterdam: John Benjamins.
- 林四郎. 1977. 「現代の文体」岩波講座日本語10 文体. 東京: 岩波書店. 349-393.
- Horie, Kaoru. 1993. "From zero to overt nominalizer no: a syntactic change in Japanese." Japanese/Korean Linguistics 3. ed. by Soonja Choi. Stanford: CSLI. 305-321.
- . 1995. "What the choice of overt nominalizer no did to Modern Japanese syntax and semantics." Historical Linguistics 93. ed. by Henning Andersen. Amsterdam: John Benjamins. 191-203.
- 井手至. 1967. 「形式名詞とは何か」講座日本語の文法3 品詞各論. 東京: 明治書院. 37-52.
- 久野すすむ. 1973. 日本文法研究. 東京: 大修館.
- 三輪志保. 1995. 現代日本語における「のだ」の語用論的機能の研究. 東北大学大学院国際文化研究科修士論文.
- 渋谷倫子. 1996. 「もう一つの現実を表す「の」」日本語教育91号. 25-48.
- 田野村忠温. 1990. 現代日本語の文法 I. 大阪: 和泉選書.